

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	替え歌という難題
Author(s)	勅使河原, 美知子
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 23 - 25
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045067
Right	
Relation	



替え歌という難題

勅使河原美知子

△調査▽

二年 新宿区立四谷第一小学校

三年 町田市立町田第三小学校 25名

四年 世田谷区立玉川小学校 36名

五年 世田谷区立玉川小学校 33名

六年 横浜市立三沢小学校 42名

〃 横浜市立汲沢小学校 35名

〃 横浜市立汲沢小学校 38名

〃 横浜市立汲沢小学校 38名

〃 横浜市立汲沢小学校 38名

〃 横浜市立汲沢小学校 38名

〃 横浜市立汲沢小学校 38名

△調査に使用したものと歌▽

静かな湖畔

静かな湖畔の森のかげから

もう起きちゃいかごとカッココが

鳴く

カッココカッココ カッココカッココ

カッココ

結果的には、私の整理担当した「替え歌」からは、資料的価値を持つ程のもの、あらわれてくれなかった。但し、附随的にはあるが、かなり重要な問題点と思われることを考えさせられたので、この方を主として、まとめてみた。

わたしたちは、本号のテーマである「子どものことばを操る意識」を探る為、その問題点や、その調査方法等

について、何回かの研究会を行った。

この「替え歌」が、その恰好の対象に擬せられたことは、本会ならずとも、日常生活に於ける言語操作を特別に意識する具体的な会であり、事例であると誰しも思うところであろうから、この段階までの運びに特別の齟齬があったとは思えない。だが調査結果からは手続、方法、よりも以前に「替え歌」によって、その方面での子どもたちの能力を見届けようとした。いわば、常識的判断の甘さがあったように反省する。

その根本的なことの一つに「替え歌」ということが、子どもたちにとって、概念的にはわかっていても、実際的には未経験であることが、調査以前に問われて然るべきこととして挙げられる。われわれは、このことを軽視というよりも、われわれ自身のこの陥穽に落ち込んでいた。後に引用する二、三の例からも、二年生すら充分に「替え歌」ということを知っている。この知っているということ、われわれが調査に踏み切ったことに対してそう思うのである。つまり、知るということは、この場合、受動的な知識であり、替え歌するということの、能力とは、直接的には分離させて考えねばならない。しかも、替え歌をするルールを新しく設けて、それに従わせるのではなくて、子どもたちの銘々の「知っ

て」という理解に基かしめれば、出て来る替え歌が「知っている」ことの証明の為にのみ奉仕させられることを、われわれはどうして予め気が付かなかったであろうか。

かくして得られた資料は、利用することは出来る。しかし、本号で取り上げようとすることばを操る意識とは遠くなっている。ことばを操る意識が、替え歌によって覗えるとしたわれわれの見解はどうであったであろう。替え歌が、もと歌からの離脱であったら、もと歌の完全消失であったりはならない矛盾をはらんだまま、替えるという印象は成立する。動きとして把えるならば、もと歌の動きと完全同一からは離れて、同傾向、同種類、類似、反対、対照、等々への移りであり、変化でなければならぬ。その移り、変化は、もと歌と替え歌との関係の中で成立するのはいうまでもないが、この関係をどう関係づけるかによって、替え歌の評価とするといいだろう。

一、もと歌の字句の変更
二、もと歌の世界の変更

右の二大別が原則的に考えられる。勿論、両者は、それぞれを目的として結果的には他者と混合する。たとえば、字句変更を思いついて、全体的には、世界を変更せしめていたというようになことである。この逆もまたあり得る。

結果的には、私の整理担当した「替え歌」からは、資料的価値を持つ程のもの、あらわれてくれなかった。但し、附随的にはあるが、かなり重要な問題点と思われることを考えさせられたので、この方を主として、まとめてみた。

但し、この関係は、必ずしも正比例的ではない。つまり字句修正を多くすれば、世界が変るとは限らない。たとえば仮りに、芭蕉の句の一字変更によつて、螢が生きた死んだというようなことも起り得る。だが、この場合は、替え歌などということには誰も受けとらない。あくまで、もと歌の修正である。替え歌という意識は結局、もと歌を尊重するという関係に於いて成立する。もと歌を訂正して、もと歌の世界に接近して、もと歌の意味を増幅したり縮小したりしては、替え歌とはいわない。広辞苑によると「或る歌の旋律に、他の歌詞をあてはめたもの」というが、これではよく分からない。結局、替え歌が、替え歌として満足すべき条件は、字句変更よりも、世界変更の方にある。あるいは、世界変更のために、字句変更が伴わせられるという考え方が妥当する。

しかし、この世界変更は、何によつて思いつくのであるか。それを刺激するのは、もと歌以外ではない。しかももと歌の内容世界を見ることによつて、他の世界へ連想が転化するといふ矛盾か、さもなければその両者の複合において替え歌の内容が成立する。まとめてみると、

一、もと歌がどういふ歌であるか
(つまり世界)という直観もし

くは理解。

二、一の世界の構造(つまり部分的字句の役割)についての直観もしくは理解。

三、一、二のことがらからの轉換的イメージ(他の世界の想像)がわくこと。

四、三のために、構造的に支えとなっている字句が、抽出され、その字句を変更すること。

五、その変更する目的、方法において替え歌のカテゴリーが決定されている。

(但しこのことは、もと歌によつてそれぞれが変更される限界があると思われ、二つの替え歌によつて、替え歌する全ての能力とはならないことは勿論である)

調査結果を数字であらわす程にまで分類整理が出来るものでなかつたので、回収された各学年の具体例について大體の傾向を次に述べてみよう。

◎何をどう替えようとするか。
。しずかなこはんの森のかげから
もう帰ったらいかがとカッコーが
なく
カッコー

(三年 女子)

最も替えられることの少い用例を見つけてみたのである。替える意識が字句の一箇所に停まっただけということ

である。

。しずかな湖畔の森の中から
もう出てこないとすすめがなく
チュン

(三年 女子)

なぜ、もう出てこないのかわからないけれども、とにかく、字句的に替えることをふやしている。但し、それ以上のものではない。

。うるさいこはんの森のかげから
もうねちやいがとねこがなく
にゃあ

(三年 男)

右の例は、字句を替えるに、対立概念を選んだということ、そのために、以下、その効果を上げるために、筋が出て来て、単純な字句変更とだけではすまされない結果となった。

この「うるさい」と対立概念を選んで始まる替え歌は、不思議なことに、三年生に多くあらわれている。二年生には、たった次の二例しかない。

。うるさいこはんのもりのかげから
もうおきちやいがと犬がなく
わん

(二年 男)

。うるさいとなりのうちのかけから
もうやめちやいがとゆうい(言
い)にいくが
やめろ

(二年 男)

前者は、字句、後者は筋から、発想されたことを物語る例だと思われる。冒頭の「しずかな」を替えるに選ばれた語が、案外少いことに注意すべきことであろう。

学年毎に示すと、

二年 ちいさな(3) 大きな(3)

うるさい(2) おかしな(き
たない。きれいな。にぎやか
な。ふかい。

三年 うるさい(20) きれいな(3)

きたない(2) 小さい(2)

大きな。すてきな。ふらふら
な。*おいしい。*。*
ずかな(2)

* おいしいは湖畔をこはんに替
えたため。

* とつてもしずかな、は、二
句目の湖畔の を省略して、
二例とも「*とつても静かな
森の中から」と替えている。

四年 小さな(3) うるさい(3)

大きな(2) 小さい。やわら
かい。楽しい。

五年 うるさい(3) 小さな(3)

大きな。きたない。ふけつな。
明るい。遠く。せっかく。広
くて。

六年 うるさい(6) *おいしい(3)

*とつてもうるさい。大きな。
すてきな。あーつい。すっか

り。だんだん。

※二年と同上

※二年のとってもしずかなが、

順調とすれば、これは逆強

調。

学年の発達に比して、それほど、もとの初句が、様々に替えられるということではない。語彙の増加によって、それが能力的にむずかしいということではおそらくあるまい。初句を替える興味よりも、別の関心があつたとすべきである。右の例以外は、もとの「静かな」を踏襲しているのは三年生までで、それ以上は、形容動詞、形容詞、副詞にこだわらなく、名詞、代名詞、動詞で、平然と始められている。この変則の甚しいのは、四年生で、そのため語調すらも整っていないのが多い。しかしそれだけに、一体何を替えようとしたのかを考えさせるのである。つまり、逆に言えば、この子らの替え歌は、原型を最小の限界にまで押しやっ

て、変更の部分を最大にしようとして

いることになる。

。勉強しても、たいくつで困る
そおーっとぬけたが、つかまつた
ごめーん

（四年男子）

。時計は一時、二時あるけれど

ぼくの時計は 三時だけ

チクタク グー

（四年男子）

。ユネスコ村へ えんそくに行つて

矢野君 よつて苦しむよ

おえーく

（四年男子）

結局、これらが原型として残したのは、最後に擬声語でまとめるということだけであろう。しかし、それだけにこの傾向を持つ子どもたちは、奇想天外さを盛り込みたさでいっぱいなのであろう。内容（題材）は身近な生活経験を採用している。五年生では、型の上での変則さは、やゝすなおになるが、内容（題材）は、社会的事象や性的関心を示すものを歌おうとする。

。大きな日本の川崎近く

けむりや公害で せきが出る

ゴホン

（五年男子）

。きたくないアパートに住む人たちは

ゴキウリやハエに困つてる

ランラン

（五年男子）

替え歌を作る意識が、競作するという条件を伴いがちであるためなのであろう。内容（題材）本位になって新奇さを競い、原型の形式を忘れる。それも、二、三年では、それを忘れる程、発想が自由ではない。大体四年生をピークにして、再び、原型の形式の利用に戻るように思われる。強いて言えば、

何をどう替えるかが、何をどう残すかに移って来ている。

◎何をどう残そうとするか

。おとうさんの鼻から鼻毛が出たよ

鼻毛を切れと子ども言う

チョキ

（六年男）

。静かな静かな町のおくから

戦車をおさないと反たいは

わあっしょい

（六年男子）

もと歌の語句よりも、文型に着目しているということである。「の」から「と」と（が）」で結びの擬音、擬声に至るとい形式をつけている。もちろん、もと歌の内容（題材）とは全く無関係のものを選んでのことである。

以上、大体の発達の経路と思われることをまとめてみたが、内容（題材）と形式とを、ここに述べた六年生ほどに無いにしろ、みごとに整えた特例が二年生にあったことも、付け加えておく。

。ちいさなとりごやの中のほうから
やきとりにしないでと なくにわ

とり

ケッコー

（二年女子）

擬声語まで洒落ることが出来るのは、特殊才能であろうか。



（東京・四谷一小・教諭）